

「有機的知識人」概念の再検討にむけて
—Marcella Bencivenni, *Italian Immigrant Radical Culture : The Idealism of the
Sovversivi in the United States, 1890-1940* をめぐって

綿貫ゆり

はじめに

民衆史と思想史の交差点に関心を持つ筆者にとって、19世紀末～20世紀初頭のニューヨークを舞台としたイタリア系アメリカン・ラディカルの営みは、現在にはね返る輝きを持つ存在として映る。それはルーツ探しとしての移民史や、マイノリティ史といった民衆史の方法だけでは捉えることのできない営みであり、国際社会主義という大きな政治思想の潮流を踏まえて考えることで、初めてその重要性が見えてくるのだと、言わねばならない。

Marcella Bencivenniの研究は、1890年～1940年のイタリア系ラディカル—*sovversivi* (過激派)—を国際社会主義の文脈に置き、これまでの組織・綱領分析中心であった研究領域に、文化的側面からアプローチする点で、他の研究と一線を画している。ここでの文化的とは、イタリアという地域の伝統、草の根の団体、文芸活動、政治的営みと融合した芸術という意味を有している。

その手法は、従来の移民史研究・左翼研究そして文化史を横断しつつ、アメリカ合州国におけるイタリア系移民ラディカルの広範な文化を明らかにするというものである。研究史における独自性と新しさはもちろん、一層異彩を放つのは、“ラディカル”という言葉に、政治的立場選択の意味を込めている—かつ、それをいとわない姿勢である。

彼女は“ラディカル”という言葉で、「ヨーロッパの政治的左翼と結びついた、階級を基盤としたイデオロギーの全範囲を包含するもの」として用いている。ヨーロッパの政治的左翼とは、アナキズム・社会主義・サンディカリズム・共産主義の主に4つのグループを示している。

これらのグループは、教義上重大な相違点を有してはいたけれども、同じゴールを目指してもいた。その到達点こそが、この“ラディカル”に込められている意味の重要性であり、同時にこの研究が今存在することの意味の大きさを示している。また同様に、私たちが彼女の主張を知るべき理由でもあると、いうことができるであろう。到達点—「資本主義を打倒し、労働者を解放し、社会的かつ経済的平等を確立すること」への共感・共鳴のうえに、この研究の目的は据えられたのである。

第一章 「有機的知識人」概念について

soversivi の生きた環境、彼らの信念、文化的・芸術的活動といった文化的世界を再び創造することを試みた、Bencivenni の研究へと足を踏み入れる前に、整理しておきたい要素がひとつ残っている。それは、Bencivenni 自身も言及している、ラディカル・カルチャーの担い手であった *soversivi* が“知識人”という性格を有していたことから始まる。

コミュニティーの“建設者”であり、“オルガナイザー”であり、そして“永遠の説得者”であった *soversivi* を、アントニオ・グラムシの概念である「有機的」知識人の「完璧な例である」と、彼女は述べている。私はここでまず、この「有機的」の意味について、ジェームス・ジョルの『グラムシ』と、エドワード・サイードの『知識人とは何か』に依拠しつつ考えをめぐらすこととしたい。そして、この議論を携えて、*soversivi* の文化世界を見てゆきたい。

二つの枠組み

グラムシの知識人論は、知識人を2つに大別する枠組みを提示しているが、その2つとは、「伝統的」知識人と「有機的」知識人という枠組みである。前者は「聖職者など、普通に知識人と考えられている人々、ある社会で知的指導という課題を課す人々¹」と、おおまかにまとめられている。

さらに後者は、「どちらかというとならぬ彼らの所属階級にもっと密接に縛りつけられている」人々であるという。またサイードの説では、この「有機的」知識人という存在が、サイード自身の生き方・立場選択の例示・対比とともに鋭く考え抜かれている。その議論において、知識人のタイプは、「伝統的」知識人＝教師・聖職者・行政管理者とされ、いまひとつである「有機的」知識人は、「階級なり運動と、それも知識人を利用して利害を組織化し、権力を手に入れ、支配権の拡張をはかる階級なり運動と直接むすびつく」知識人という、グラムシの説を解釈するところから始まる。

サイードは、現在の広告代理店や宣伝担当のエキスパートたちが「洗剤会社なり航空会社なりが市場をより多く確保できるよう、さまざまなテクニックをひねりだしている」ことを指摘し、彼らこそグラムシの定義による「有機的」知識人といえると述べている。彼が解釈するグラムシの考えでは、「有機的知識人は、社会に積極的に関与する、つまり精神構造を変革し、市場を拡大しようと日々奮闘する」とされる。ここでの力点は、「有機的」知識人が、「ひとところにとどまり、十年一日のごとく同じ種類の仕事をつづけてはいない」という部分にある。つまり、彼らは「いつも動いている。いつも成長している」のだ。

ここに、ジュリアン・バンダの知識人論—「真の知識人は、リスクを負う」ものであり、

¹ ジェームス・ジョル『グラムシ』（岩波書店、1978年）126ページ。

「超然とし」、「少数の強烈な個性をそなえた個人」という像、「現状に対し、ほとんどいつも異議申し立てをしなくてはならない」人という像を対比させる。そして、そうしながらも、現実に近い像は、グラムシの分析であると述べるのである。しかし、まだここではこの知識人の決定的な性格は語られていない。

立場選択＝覚悟

「知識人なくして近代史における主要な革命は存在しなかった。だが逆に知識人なくして反革命運動も存在しなかった。」という言葉が突破口となる。つまり、グラムシの「有機的」という言葉が真の威力を発揮するためには、次のことが必要不可欠なのである。

「…知識人とは、あくまでも社会のなかで特殊な公的役割を担う個人であって、知識人は顔のない専門家に還元できない、つまり特定の職務をこなす有資格者階層に還元することはできない。わたしにとってなにより重要な事実は、知識人が、公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、メッセージなり、思想なり、姿勢なり、哲学なり、意見なりを表象＝代^{レプリゼント}弁し肉付けし、明晰に言語化できる能力にめぐまれた個人であるということだ。」

そして、ここで代弁すべき公衆が、社会的弱者、マイノリティであると言える者こそが、「有機的」知識人たるべき者であろうと、私は考える。サイドにとって、真の知識人とは「批判的センスにすべてを賭ける人間」である。その使命は、警戒と批判のために「つねに努力すること、それも、どこまでいってもきりのない、またいつまでも終わらない努力をつづける²」ことだと、彼は断言する。

また、ジャン・ポール・サルトルは、『知識人の擁護』において、

「彼が支配権の末端に連なる一代理人となることを拒否し、自分の与り知らぬ目的の手段たることを拒否するならば、そのとき彼は『知識人』となるのです。いいかえれば、真に自分と関りあいのあることに意を用いる怪物となるのです。その怪物を、他の人びとは、自分と関りあいのないことに差出口をはさむ人間と呼ぶわけです。」

と、ユーモアたっぷりの論を展開している。

そして、「あらゆる知的技術者は潜在的知識人」であるとし、その変貌を完成させる理由の総体は「社会的次元」に属するものだという。「社会的次元」とは、具体的には「個人的状況、生活水準、ポストの不足、古い価値の清算、個別主義的イデオロギーの転覆、あるいは逆に知的技術者に嘘を言わせ、誤った報道をさせようとする権力側の圧力等々の要因」

² エドワード・W・サイド『知識人とは何か』（平凡社、1998年）54ページ。

のことを指している。

サルトルが示す知識人の特徴は、「自己のなかにも社会のなかにも認められる対立」―「一方では実践的真理の探究とそれにふくまれる規範のすべて、他方では支配階級のイデオロギーとその価値体系、その二つのあいだの対立を自覚すること」であり、それは「社会のなかに現実に存在する矛盾の開示」を意味している。さらにその開示は、「階級間の葛藤の開示」「支配階級自体のなかの葛藤³」とも述べられている。

ここに至って、顔のない知識人が、イタリア系アメリカン・ラディカル―*sovversivi* へと、はっきりした輪郭をもって、立ち現われてくるのである。“誰の側に立つのか？”すべてはそこにかかっている。Bencivenni の研究の基礎に横たわる前提として、知識人という存在―特に立場選択、それも弱い側・マイノリティの側の声を代弁する、体制に異議申し立てをし続けるという立ち位置を選択する人びと―があることを確認できるであろう。

第二章 エスニックの位置づけ

1880年～1920年のあいだに新世界―アメリカに流入した500万人以上の移民がイタリア系（そのうち4/5が南部地域および南部諸島出身）であったが、南欧・東欧からの“新移民”のなかで最大のエスニックグループであり、総移民人口の20%以上を占めていた。深刻な農業危機と、特に南部は伝染病や自然災害が圧力となり、1801年～1901年の100年間で1800万人から3200万人への飛躍的な人口増加、政治的に不安定さなども拍車をかける原因となった。イタリア系移民の大多数は非熟練の肉体労働者としてアメリカ市場に参入した。1899年～1901年の移民職業分類によれば、全体の83.9%は *contadini*（農民）であり、5%が熟練工・職人―床屋、仕立屋、靴職人、煉瓦職人―とみなされている。そして、たった0.5%のみが、知的な意味における職業人とされている。

ホワイトネスとその限界

80%以上を占めた農民は、その出自からアメリカ合衆国において（もちろんどのエスニックであれ移民に対しての差別は当然存在しはしたが）、アングロ・サクソン系の人々から、外見・習慣上さげすまれ、文化的にも遅れた・劣等の人間と見なされたことを、留めておかねばならない。近年、ホワイトネス―白人性を扱う研究においても明らかにされつつあるように、彼らは単に“劣っている”というだけでなく、“ホワイトではない”と見なされ

³ ジャン・ポール・サルトル『知識人の擁護』（人文書院、1967年）39ページ―48ページ。

た存在であった。

北欧出身の労働者が *white men* であったのに対し、南イタリア系を *black labor* と呼んだこと、入国管理において *South Italian* という呼称が白人から黒人の中間的存在という扱いであったことも、確認されている。そして、マシュー・ジェイコブソンの指摘による、“イタリア系は単に白人に見えなかった”のではなく、“白人らしくふるまわなかった”ことが、反イタリア系感情を引き起こす要因だった点も挙げられている。

“Dago” “Wop” “Guinea” などの罵声が浴びせられ、大衆的雑誌・新聞は南イタリア系を「生来」感情的で残忍、不誠実で執念深い」などと書き立て、イタリア系に対する否定的な見方は労働組合の側からも向けられていたことは、見過ごすことのできない点である。1890年代に南イタリア系が大量に流入し始めた際に、職業別労働組合は「新移民（イタリア系およびスラヴ系がその大半を占めた）がアメリカ労働者の生活水準を下げている」と主張した。アメリカ労働総同盟（AFL）の議長を務めたサミュエル・ゴンパースは「イタリア系労働者は農村出身であるがゆえに、労働組合主義の価値を正しく認めることができない」と言っていたことなど、枚挙にいとまがない。

ただし、イタリア系に対する差別がアフリカ系やアジア系、メキシコ系に対するそのように、体系的で残酷な（非白人と定義された）人種差別ではなく、彼ら自身の「カーステータス」によって、「到着しだい」非白人系の移民には与えられることのなかった、政治的・法的特権が与えられたことも、確認しておかねばならない。

つまり、帰化する権利・安全な地区に住む権利・確実性の高い仕事に応募する権利・異人種間結婚の権利などを有したのである。生命・身体の安全という面だけでなく、社会的地位の上昇を可能とする（第二世代の移民は結婚によって、より高いステータスを得ることを目指した人も少なくなかった）意味を持った点は重要である。

労働運動史におけるイタリア系

先に述べた、組合でのイタリア系移民の評価の低さ—労働者組織と闘争への参加に消極的か、あるいは全く役に立たないと見なされた—は、労働運動史においてイタリア系労働者が過小評価された原因となっていることも、Bencivenni は指摘している。1980年代に社会史の領域でマイノリティ・周辺の地位の人びとに光が当てられるようになるまで、イタリア系の性格については、一面的で浅い認識がなされていたにすぎない。

南イタリア系の特徴は、均質な小作農民—とりたてて目立たない保守的な人びと、従属的で無感情な人びと、“道徳的基準のない”家族優先主義の人びと—という認識が、無批判に受け入れられてきたことは、大きな問題であった。核家族中心の生活による視野の狭さが、集団的・政治的行動を不可能にしたという、ずさんな説明がなされていたのである。

こうした見方に批判を加えた Donna Gabaccia らに同調し、Bencivenni も *contadini* が非常

に強い階級意識を持っていたことを主張する。彼らは労働組合主義や社会主義の原理を理解できたし、小作農たちが結束・連帯しストライキや一揆に積極的に参加したことを、とりに上げている。最も重要なイタリア系ラディカルの一とされる Carlo Tresca の言葉―「現状の社会が変革されなければならないと確信するのに、カール・マルクスを読む必要はない」を引用し、不公平の度合いがどれ程酷い社会であったかに言及する。

この言葉もまた、なぜこの研究が 20 世紀転換期という時代から、^{いま}現在に向かって強烈な光を照射してくるのかを、私たちに示していると、感じずにはいられない。現状に異議申し立てをしなくともいい理由が見つかる瞬間は、一日に一度も見つからず、弱者とマイノリティをとことんまで押し込めることに躍起になっている醜い体制が、如何なる瞬間も私たちに迫ってくるのは明らかなのだから。

第三章 旧世界における抵抗の思想・経験―リソルジメント～19 世紀末期

sovversivi の政治行動は、“階級意識”のみで説明することはできず、イタリア系のエスニックアイデンティティや移民としての諸経験はもちろん、インターナショナリストとしての信念と労働者階級による革命への希望といった、複合的な視点が必要だと、彼女は主張する。

歴史家たちがこれまでのイタリア系アメリカン・レフト研究において強調してきたような、個人主義・分派主義についても、先の“共通の未来像”の存在によって、挑戦し乗り越えをはかる。運動の政治的分裂を否定・縮小させることなく、彼らの共有した文化的伝統・道徳的価値観・同じ夢と希望について、描き出してゆく。彼女は“共通の未来像”こそが、社会主義運動に不可欠の原動力となったと強調する。

以下では、この研究で特に掘り下げられている *sovversivi* の共有した、旧世界のルーツ・実践した文化的活動・指導者たちの姿を紹介し、ラディカルたちの文化的世界を見てゆくこととしよう。

農村社会の「性格」

イタリアの農村社会は従来、固定的・変化に乏しいという説明がなされてきていたが、新たな研究群により、覆されてきていることが同時に示されている。農民の生活には、はっきりとした移動性、職業順応性の高さ、闘争的行動（社会的直接行動主義）といった特徴が指摘される。

農村経済はオリーブや果樹・穀類の収穫を基盤としていたため、農業の閑散期（＝失業）に行った他の仕事が、移動性につながった点が挙げられる。小作農民たちは、煉瓦職人、

指物師、鍛冶職人、靴職人、職工、紡績工といった仕事で生活を補い、その仕事は家から数百キロ離れていることも珍しくなかったという。その“行ったり来たり”という生活の繰り返し—移動性—は、彼らの日常であった。

また、19世紀末以降、それまで主流だった自発的闘争暴動や抵抗の形態（＝強盗・山賊行為・一揆）が、より組織された形態へと進化した点も重要である。組織された闘争は、根本的な政治・経済社会の変革を目指すものであった。1861年のリソルジメントが、政治的安定につながることなく、経済的にも苦しい状態が続き、インフラストラクチャーの発展も社会改革も成功しなかったところに、1870年代の農業恐慌が追い打ちをかけた。生活水準がイタリア全土で悪化し、憤りを強めてゆく過程で、人びとのあいだに労働者階級としての自覚がゆるやかに覚醒していったという。組織された活動も高まり、相互扶助組合や、労働同盟、労働会議所、共同組合、ストライキの増加へとつながっていった。

新たに課された小麦税への反乱に端を発し、小作農と織物労働者らによって、1870年～1880年の10年間に465件のストライキが闘われた。賃上げ・普遍的福祉を求めたストライキを、彼らは自ら組織したのだった。

ラディカル理念の伝播

階級意識の向上には、識字率の漸進的な上昇も大きく役立った（統一後から1911年までに、人口の58%が読み書きできるまでに至った）とされているが、それ以上に重要な要因が存在した。新たなラディカル—リソルジメント期の共和政体主義、その後を広まったアナキズム、さらに社会主義—の理念が広まったことを、次に見てゆきたい。

<共和政体主義>

共和政体主義は、ジュゼッペ・マッツィーニの指導による、統一を目指す政治的運動から生まれた。共和政的価値観と平等主義が結びついたもので、この考えは国家統一のために闘う支えとなっただけでなく、遍く人びとの“道徳的向上”、そして進歩のための闘争を支えた。階級性、それによる特権、不平等といったものを、容赦なく断罪し、普通選挙と教育の必要性を強調するマッツィーニの主張は、イタリア労働運動の発展に大きく貢献した。

彼の collectivism（集産主義）と共同組合の核心となったものは、1850年代にピエモンテにおいて労働者らが結成した初の相互扶助協会であった。この組織は、法的・医療的な援助と、教育の支援とをメンバーにあてがう、自助組織であった。この相互扶助協会は1895年までにイタリア全土で6725を数えるまでに広まった。厳密な意味での労働者組織ではなかったとされるが、協会は新たな労働者同盟や労働者協同組合（労働者が組合員となり、出資・運営する企業）のモデルとなり、フランス・サンディカリストの *Bourses de travail*

(1887年パリにおいて設立された労働取引所。職業斡旋を主要な業務とした⁴)と、近代(職業別)労働組合(例えば1906年に組織された *Confederazione Generale del Lavoro* : CGL—労働総同盟、1912年に組織された *Unione Sindacale Italiana* : USI—イタリア労働組合など)に基づいた労働会議所の先駆けとなる存在であった。そして、イタリア統一後、1872年にマッツィーニが世を去ると、次なるイタリアの革命的前衛として、アナキズムが浮上してくる。

<アナキズム>

ロシアのアナキスト—ミハイル・バクーニンの1864年イタリア到着が、その契機となった。知識人をはじめとした多くの転向者が、バクーニンに惹きつけられた(特にナポリやエミリア—ロマーニャ州に多かった)のである。バクーニンは、早急な社会革命と、国家を含むすべての慣習上の権力と権威の破壊を唱えた。ジョージ・ウドコックのアナキズム研究から、イタリアにおけるアナキズムの地盤を確認しておきたい。

1864年にバクーニンが入国する以前からすでに、カルロ・ピザカーネ(革命家で、ナポリのサン・ジョヴァンニ公という名門に生まれた人物。1848年革命時にマッツィーニのローマ共和国軍の参謀長としてめざましい活躍をとげ、1857年のカラブリア冒険—地方の反乱分子が糾合しなかったため、ブルボン王家の軍隊に敗れた—で戦死した)の論文集『試論集』(*saggi* というタイトルで、彼の死後、パリで出版)を通じてプルードンの思想は紹介されており、イタリアの共和主義的思想に影響を及ぼしつつあった。

ピザカーネは、プルードンと同様、「国家が解放される前に農民が目覚めねばならず、それは、農民に経済的解放、すなわち農民の直接の抑圧者たる地主の拘束からの解放を与えることによって初めてなされうる」と考えていた。そして、「あらゆる人にとって“彼自身の労働の成果は保証されて”いなければならない、また“すべての他の財産は廃止されるべきであるのみならず盗みとして非難されねばならぬ”」ということを要求した。

彼は運動を形成しはしなかったものの、個人的な仲間・死後の著作を通じて、若い共和主義者たちに大きな影響を与えた。それが1864年のバクーニンのフィレンツェ到着後の、友好的な雰囲気準備したともいえる。バクーニンが組織したフィレンツェ同胞団と国際同胞団の双方の中に、ピザカーネの古くからの同志が幾人もいたことが、その関係を示唆している。

1869年はじめ頃から、有力なアナキズム運動がイタリアに勃興しはじめ、最初は南部(最も活発な支部はナポリ支部—国際労働者会議の支部となった)に限られていたが、70年代初期にはカンパーニャとシチリアにも支部が現れた。71年の中頃になると、カルロ・カフ

⁴ 横山隆作『イタリア労働運動の生成(1892年～1911年)』(学文社、2001年)48ページ—49ページ。

イエーロ、エリコ・マラテスタといった若い闘士たち（彼らはみな南部地主の教育ある子弟であり、その出身地は農民が貧困を極めた地域であった）が、バクーニンを指導者として頼り、登場してきた。

貧しく無防備な人びとに対してなされる不正を憤る彼らは、マッツィーニの信心深い自由主義に耐えられなくなっていた。（晩年のマッツィーニは保守化が進み、ヨーロッパにおける社会主義の影響に不安を感じ、パリ・コミューンを「無神論と真のナショナリズムを否定するもの」として非難していた）左翼共和主義新聞「赤色新聞」（ミラノ）は、1871年7月24日の「ジュゼッペ・マッツィーニに対する一インターナショナル会員の回答」というバクーニンの厳しい文書を公表し、さらにバクーニンは同年秋に「マッツィーニの政治的神学とインターナショナル」という論文で、アナキズムの影響拡大を図った。これはある程度インターナショナルの組織拡大につながったとされている。

他方、1871年12月には *Fasci Operaio, Workers' Union*（職工団）運動が中部イタリアに現れ、1872年2月の集会（ラヴェンナ、ルーゴ、フォルリから参加）では、自治コンミューンを主張するアナキスト的要求を採用し、インターナショナルに加盟するという出来事が起きた。そして、同3月には全国的規模の、ボローニャにおける初のアナキスト集会を招集したのである。その会議を指導したのは、アンドレア・コスタを首領とする若いローマニャ人の一団であった。ここでなされた宣言は以下のものであった。

“いかなる＜権威主義的＞政治も無産階級を害する特権階級の行為である” “社会問題の解決を目的とする全般的暴動に賛成する”

21の支部が代表を送り、1872年8月4日に開催されたリーミニ会議において、インターナショナルのイタリア連合が（自治権のある諸支部が単純に結びついた形の組織として）確立したが、この会議は、その後10年間にわたるイタリア社会主義の＜反権威主義的＞傾向を打ち立てただけでなく、インターナショナルの全体の運命をも間接的に決定するという、重要な意味を持っていた。つまり、この会議なしに、その後10年間のイタリアにおけるアナキズムの成長はなかったといえるのである。

ハーグ大会に対する態度決定をめぐり、バクーニンおよびスペイン連合とジュラ連合における彼の一派が、イタリア人たちに「ハーグ大会へできる限り多くの代表を送るように」と呼びかけていたにもかかわらず、カフィエーロとコスタは、ハーグ大会の承認拒否とヌーシャテルで開催される別の＜反権威主義的＞会議に代表者を送るよう呼びかけるという、過激かつ全面的な決定を決議したのだった。この、マルクス主義者との絶縁という闘争精神は、会議の後にも継続し、左翼共和主義者とのいかなる同盟も拒絶し、バクーニン主義へと接近していった。

“暴動的闘争の決意”を明らかに含む、彼らの態度が過激になるにつれ、イタリアにおけるアナキズム運動はいっそう強力になり、1873年3月に再びボローニャにおいて全国的

会議が開かれた時には、支部の数は150を数え、約7カ月前の7倍にまで拡大していたのである。警察の迫害を受けた者は、名誉ある英雄と見なされる時代に、カフィエーロとマラテスタという「伝道者」によって会議場での闘争から革命的闘争への移行がなされ、1876年に、それは実践へと移された。

1873年～74年の冬に闘われたストライキとハンガー・デモは、彼らの直接行動主義の小規模な現れにすぎず、74年夏のボローニャのデモが計画されたが、これも警察隊と軍隊によって阻止され、その他の都市でも蜂起計画は粉碎されていった。1877年には南イタリア・ベネヴェントの蜂起を計画したが、南部イタリアの農業労働者はメシアニズムに無感動であり、アナキズムは比較的小都市の運動にとどまることとなった。この蜂起で、政府は危機感を強め、投獄および新聞と組織の禁止を再び行うようになった（とはいえ、このころの裁判では、王政に敵意を抱く多くの陪審員によって、ほとんどの拘束者が一慣例的に一釈放された）。

度重なる失敗によって、最も戦闘的な暴動主義者たちでさえも、その熱意を失いはじめていた。1878年4月に再組織されつつあったインターナショナルの秘密会議で、全国的規模の“総蜂起”の決定がなされたものの、それが実践に移されるまでには至らなかった。集団による実践の挫折があった一方、個人の暴力行為—例えば1878年11月のジョヴァンニ・パッサナンテによる新王ウンベルトの暗殺未遂など—が始まった。その行為が、アナキストの呼びかけであった“人民の真の敵”として“すべての国王、皇帝、共和国の大統領、あらゆる宗教の僧侶”を殺すべきという言葉と関連するものと見なされ、事件後相次いで爆弾事件が発生し、インターナショナルに対しての迫害はいっそう強められる一口実を与えてしまったのだった。

このテロリスト行為に共謀した疑いの有無にかかわらず、名の知れたアナキストの闘士たちは皆、投獄か、あるいは亡命を余儀なくされたのである。そうして、1871年～1877年のあいだ運動を指導してきた若い指導者たちが、もはやイタリアで活動できなくなったために、その地でのインターナショナルの復活は不可能となったのである。

しかも、ただ指導者が“亡命していた”ということだけが問題だったのではなく、彼らの“転向”もその原因のひとつであった。まず、1879年に、2年間の投獄に服していたアンドレア・コスタが獄中転向声明—アナキズムの放棄—を出し、議会制民主主義へと転向（その後1882年下院当選、社会党創立に貢献）した。1882年3月にはカフィエーロが、ついに社会民主主義へと転向（彼は1883年春にフィレンツェで発狂、1892年に精神病院で死亡）したのである。

1881年頃までに、イタリアにおけるアナキスト活動での地域的組織はほとんど失われ、全国的組織も全く残っていない状態となり果て、局地的な集団の、散発的活動へと、衰退してしまっただけでなく、1880年代～1890年代のアナキズムは、そうした状況のなかで、マラテスタとメルリーノといった、“個人の驚異的な活動”によって、維持されたのだった。そして、

1890年代からの爆発的な新移民の流れに乗り、イタリア・アナキストはラテン・アメリカとアメリカ合衆国の双方で、その思想を拡大するという大きな役割を演じたのである。

この時期に、個人的テロリズム行為として、ヨーロッパ各国の元首たちの暗殺が行われたが、大部分のイタリア・アナキストたちは個人主義的暗殺者でなかったし（そもそもマラテスタをはじめとする指導者たちは、個人的テロリズムの行為に反対していた）、共同体を志向するユートピアンでもなかった。⁵

ここまで、ウドコックの研究に依拠しつつ、イタリアにおけるアナキズムの成長と衰退を追ってきた。1874年まで、アナキストは国際労働者協会（第一インターナショナル）のイタリア支部—反権威主義的組織—の指導者であった。そして続く10年のあいだに、内部分裂と政府による弾圧の結果として衰退していったことを確認したが、それに続いて、社会主義—マルクス主義（Bencivenni は社会主義とマルクス主義の概念設定がやや雑な部分が見受けられる）が、1890年までに、イタリア・レフトの支配的な勢力となっていた。

<マルクス主義>

1870年代末、マルクス主義の著作がイタリア語に翻訳され影響を持ちはじめたが、マルクス主義を広めた人物のなかで、最も重要とされているのが、理論家のアントニオ・ラブリオーラと、イタリア社会党（1892年8月結成）の主要創設者であるフィリッポ・トゥラーティの二人である。1893年、社会党の党員数は131,000名にのぼり、270の労働者組合をかかえていた。

シチリアの社会主義者たちは、1889年“労働者ファッシ”という左派系の運動を興したが、それは農村部に急速に広がってゆき、農村労働者と硫黄鉱山労働者らを300,000人以上動員した。労働者ファッシは一連の暴力的放棄を指導し、1893年には地主および西シチリアの州税に反対する3カ月にも及ぶストライキを組織した。クリスピ首相はこうした動きに弾圧を加え、運動は鎮圧—全指導者の逮捕と1000人以上がペナル島へ追放され、100,000人が参政権を剥奪—された。そして、すべての社会主義が非合法化されたのである。

しかし、1880年代～90年代の暴動とデモは、人びとに政治的認識を目覚めさせ、政治に対する不満を抱かせたという点で、重要な意味を有した。1895年の選挙では、社会党が12議席を獲得し、社会主義者の労働組合の数はうなぎ登り、1892年の270から1896年には442へと急増したのである。

これまで一般的に農民は、こうした暴動やデモ、政党、組合といった行動に加わらなかったとされてきたが、Bencivenni は Rudolph Vecoli と同様に、農民の無関心を否定する見方—つまり、ラディカルな思想は、南部のコアな部分にまで浸透していたのだという考え

⁵ George Woodcock, *ANARCHISM : A History of Libertarian Ideas and Movements* (New York, Penguin Books, 1986), pp.274-298.

一を示している。

19世紀末～20世紀初頭のイタリア労働運動は、南部一特にシチリア、プーリア、そしてカンパーニャにおいて多くの小作農を惹きつけた。1901年には組合および労働会議所の公式会員 661,478 名のうち 23%が農業労働者であったこと（当時のヨーロッパ諸国で最も高い割合であった）が示されている。

彼ら小作農は、イタリア社会で潜在的に最も反逆心を持った人びとであったと、Bencivenni は主張する。そして、移民するときも、自発的組織と攻撃性、抵抗の姿勢を失わず、どこに落ち着こうとも政治的活動を続けたのだという。こうした人びとの中に、イタリアにおいてすでに重要な指導者・オルガナイザーであった人も含まれていた。彼らは、その理念、暴動主義・組合主義の経験を、新たなコミュニティへ持ち込み、通信文や新聞、巡回講演を通じて、思想を発展させ強化していった。イタリア系アメリカン・レフトの指導者は、イタリアにおいてすでに社会主義の夢を抱いていたが、他の多くのイタリア系移民労働者は、アメリカでの経験—民族差別と経済的搾取—によって、ラディカル化された。これは重要な点であり、旧世界の経験と新世界の新たな事情との、相互作用の結果として、理解されねばならないということを示している。

第四章 アメリカ合衆国における *Sovversivi*—「過激派」—の全体像

続いて、*sovversivi* のプロフィールに接近してみよう。

カリスマ的アナキスト

「はじめに」で確認したように、1880年代からイタリア移民のコミュニティは確実に増加してゆき、1900年にはイタリア系第一世代は 80 万人に達し、1920年までに約 400 万人がアメリカ合衆国で暮らすようになった。大都市は特に移民が多く、なかでもニューヨークだけで 40 万人を数えた。

先にふれた 1898年の労働者ファッシの蜂起弾圧の後、カリスマ的指導者の亡命がきっかけとなり、イタリア系コミュニティにラディカルな思想が普及していったとされ、そうした理論家は合衆国に滞在し、さらに他の国へ渡る、あるいはイタリアへ戻るケースもあった。その滞在期間に大きな影響を残していったのである。

例えば、イタリアアナキズムの指導者サヴェリオ・メルリーノは、1892年～1893年の一年だけアメリカに留まったが、2つの重要なアナキスト出版物—*Il Grido degli Oppressi* (1892～1894) と *Solidarity* (1892～1898) を立ち上げ、アメリカ合衆国のアナキズム運動にとてつもない活力を与えた。アナキスト詩人で、劇作家のピエトロ・ゴーリも 1894年～1902年の亡命生活のうち一年を、アメリカで過ごしている。その一年のあいだに、カタル

ニア人アナキストのペドロ・エステーヴェと共に国中をめぐり、400もの講演をこなしたのである。この数を考えると、平均で一日1.1講演という、常人には考え難い精力的な活動を行ったことがわかる。ペドロ・エステーヴェの方は、ニュージャージーのパターソンにおいて *La Questione Sociale* (1895~1908) を創刊し、アメリカ合衆国におけるアナルコ・サンディカリズムのオルガナイザーで、最も影響力を持った人物のひとりである。

その他にも、有名なアナキストであるジュゼッペ・チャンカビッラ (1872年~1904年) と、エリコ・マラテスタ (1853年~1932年) が、1890年代末にアメリカを訪れている。

チャンカビッラはイタリア人で最初の反組織的アナキズムの理論家だった。彼は制度化された、いかなる形態の権力であろうと対峙し、直接行動と、必要であれば暴力行動も唱えた。1898年~1904年に (突如死を迎えるまで) アメリカに留まり、*L'Aurora* (1899~1902) と *La Protesta Umana* (1902~1904) といった新聞を通じてアナキズムを広めていった。

チャンカビッラとは対照的に、マラテスタは組織的アナキズムを擁護し、連帯した革命的労働者階級の運動を創り上げる支えとなった。1899年に合衆国に到着するやすぐさま、彼は多くの転向者を獲得した。なかでも、*La Questione Sociale* —「社会問題」—の設立者と指導者たちはマラテスタに傾倒し、マラテスタは一時的にこの新聞の編集を行っている。一年滞在した後に、彼は合衆国を離れたが、イタリア系アナキスト運動に強く影響を与えたことはまちがいない。

スター的存在のアナキストたちは、合衆国に永住しはしなかったが、その存在感と宣伝の力は、国際的評判ともども、アナキスト運動の強固な基盤を提供したのだった。そして彼らの思想は、続く第二のアナキスト亡命者グループ (1900年以降に合衆国に到着した) によって、強度を高めていった。

第二のアナキスト亡命者グループ

カルロ・トレスカ、ルイーダ・ガッレアーニ、マリア・ローダ、ラファエレ・スキアヴィーナ (通称マックス・サーティン)、そしてファシズム台頭後のアルディーノ・フェリカーニ、アルマンド・ボルギ、ヴィルジリア・ダンドレアらが、このグループの代表的な存在だった。

彼らは、より長期間アメリカに留まったのみならず、アメリカの事情に懸りあい、影響を受けた人たちであった。そして、この人たちのなかで、イタリア系アメリカ人アナキスト運動に最も強い影響を持った人物が、ルイーダ・ガッレアーニ (1861~1931) であった。北イタリア・トリノ近郊のヴェルチェッリで、中産階級家庭に生まれたガッレアーニは、はじめ弁護士となる教育を受けたが、それを投げうってラディカルな行動主義へと、エネルギーを転換させていった。著作やスピーチ、労働者階級の組織における中心的役割によって、彼はすぐにイタリア政府にマークされ、数回の逮捕の後、ついにパンテッレーリア (シチリア沿岸のはずれにある島) での禁錮の判決を受けた。しかし、フランス人アナキ

ストのエリゼ・ルクリュの助力によって脱出し、エジプトからロンドン、そして最終的に1901年10月、合衆国に到着した。彼は最初ニュージャージー州パターソンに落ちつき、*La Questione Sociale* の指導を引き受けた。1902年にパターソンの絹織物労働者によるストライキの間、暴動を扇動したとの嫌疑をかけられ、ヴァーモント州バリーに移り、*Cronaca Sovversiva* という新聞を刊行した。バリーはマッサカッターラやトスカーナからの移民が1894年に“アナキストの聖域”を設立した場所であった。彼はその後、国外追放されるまでの16年間、熱烈で雄弁な声を紙面にとどろかせたのであった。

社会主義者の到着

20世紀初頭までに、イタリア系社会主義者の指導者たちも合衆国に到着し始めた。例えば、北イタリア・モデナにおいて社会主義新聞を編集していたパオロ・マッツォーニは、1893年にペンシルヴァニアの社会主義イタリア党 (Socialist Italian Party) を設立するのを助けた。また、リグリア (イタリア北西部) からの社会主義指導者のジュスト・カルヴィ (1905年にイタリア社会党の代議士となった人物) は、1895年フィラデルフィアにおいて新聞 *Avanti!* を刊行した。そしてファッシ・シチリアーニ (労働者ファッシ) で最も有名な英雄の一人であるベルナルディーノ・ヴェッロは、ニューヨーク州バッファローやその近郊の町においてイタリア系労働者を組織する目的で、1898年に合衆国に到着した。

他の社会主義者の指導者たち—カミッロ・チャンファッラ、ディーノ・ロンダーニ、ジョアッキーノ・アルトーニ、そしてジャチント・メノッティ・セッラーティも、合衆国におけるイタリア系社会主義者の運動の非常に重要な基礎を築いた。

共有した目的と戦術の相違

1900年までに、東海岸には社会党の公式なイタリア支部が30存在し (うち2つはニューヨーク)、東部・中西部、北東部には無数の独立したサークルが存在していた。20世紀初頭には、ラディカルの指導者と無名の活動家たちが持ち込んだ、思想と経験によってイタリア系移民は豊かなラディカル政治文化—本国でのそれに近似した—を保持したのだと、Bencivenni は述べている。その政治文化は、階級に基づくラディカリズムの凡て—社会主義 (マルクス主義)、サンディカリズム、アナキズム、そして後にはコミュニズム—に及ぶものであった。

これらの理念における究極の目的は近似していた。その目的は、資本主義打倒、労働者の解放、経済的・社会的平等の実現だったのである。しかし、革命の到達点と政府という存在に関して採用された戦術において、それらは同時に深刻な不合意も有していた。社会主義者は、“訓練された前衛”と“中央集権的に組織された労働者の政党”による“国家権力の政治的占有”—“独裁”を唱えたのに対し、アナキストは国家を“自由と相容れない

もの”と考えていた。そのため、アナキストは“すべての権威的形態”を排除し、“政治への完全なる不参加”―投票や公職選挙、政治政党への参加を含む―を唱えたのである。

サンディカリストは、社会主義者とアナキストの二つのグループの中間を代表した。選挙政治に対抗し、彼らは直接行動―ゼネラル・ストライキやサボタージュ、革命的暴動という形―を唱えた。信条や戦術の問題をめぐる（イタリアで端を発した）口論は、アメリカの土壌に移され、地域のラディカル・グループ間に克服不可能な壁をつくりだすこともしばしばであった。イタリア系移民の左翼内での指導権をめぐる個人的競争（ライバリテイ）も不和や敵意、嫌疑を醸成し、運動を弱体化させる原因となった。

そうはいつでも全体として、イタリア系移民ラディカルは、合衆国における彼らの諸国民共同体（co-nationals）のなかで、重要なマイノリティを構成し、普遍的なアメリカ労働運動に―特にイタリア系コミュニティにおいて、その数が示した以上の―影響力を長期に亘り持続的に行使した。

以上、イタリア系労働運動の指導者たちの存在と、その思想における共通目的と戦術的対立とを見てきたが、*soversivi* の文化的活動と切り離すことのできない、運動・活動の特徴についてより具に確認し、そのうえで、活動と密接に結びついていた活動へと進めてゆくこととしたい。

アナキズムとサンディカリズム

先にも少し触れたが、合衆国でのイタリアン・ラディカルのもっとも特異な面のひとつとして、初期に原動力を持ったアナキズムと、社会主義と深い関係にある革命的サンディカリズムがあげられる。アナキズムとサンディカリズムは、北東部で特に活発な運動となり、1892年にイタリアから逃れた後、第一次世界大戦までアメリカを舞台として継続したのだった。イタリアにおけるよりも長く続いた点だけでなく、他のエスニックグループにおけるよりもはるかに、イタリア系のコミュニティにおいて、アナキズムとサンディカリズムはさかんな思想であった。

これらの思想が多くイタリア系移民を惹きつけた理由は、第三章で確認してきたような、イタリアでの初期のアナキズムの影響と、アメリカに移住したアナキストたちの果たした重要な役割に負うところが多い。ただし、それだけが原因というわけではなく、イタリア系移民特有の性質と状況による部分もあったことを付け加えておかねばならない。

一般に、イタリア系移民は“出稼ぎ”“単身”、そして他のエスニックに比べて“比較的短期的”という特徴があげられるが、Bencivenni も、彼らがアメリカに永住するつもり渡ったわけではなかった点を、他の移民との相違点としてあげている。農村では伝統的に、分割相続のために零細移民が多く、家計補てんのためアメリカに出稼ぎすることを選択したことは、北村暁夫氏の研究においても紹介されている。

アメリカへは、自分の村で土地を買うための資金を蓄積し、できるだけ早く帰国しようと考えて渡ったのであり、実際 1900 年～1920 年の間に渡った移民の約半分が故国へ引き揚げたのだった。そのため、イタリア系はたいていアメリカの政治、言語そして文化にたいして—アメリカ社会と労働組合の主流のなかで行われた差別が、その態度を大いに助長したのだが—無関心なままであった。

そのうえ、1910 年までに市民権を与えられ、投票資格を有したイタリア系移民は 25% 以下という水準で、イタリア系の大多数は政治的・法的改革に対する発言権を持たなかったのである。参政権付与が不十分であったことが、イタリアでは社会主義がアナキズムをしのぐものとなったのに対し、合衆国のイタリア系労働者のあいだでは同様の結果を生まなかったことの理由である。

アナキズムとサンディカリズムは選挙政治を排除し、直接的な革命行動を信奉する思想であり、できる限り早くに彼らの生活水準を改善したいと熱望する“渡り鳥”の要求と多くの点でより両立しやすいものであった。アナキズムおよびサンディカリズムの闘争の方法は、サボタージュ、ストライキ、自発的かつ直接的な行動であった。この方法が、農民の抵抗の形とラディカルな伝統とに、より近いものであったという。

アナキストたちは“自由意志を尊重するもの”(libertarian)と革命的価値を呼び覚ますような名前の一例えば、イリノイ州スプリングヴァリーの“*I Nuovi Viventi*”(新しい人間)、コネティカット州ニューブリテンの“*I Liberi*”(自由)、ニュージャージー州パターソンの“*I Risoti*”(再生)、ニューヨーク州ブルックリンの“*La Falange*”(共産的自治共同体)、イーストボストンの“*Gruppo Autonomo*”(自治団)、ペンシルヴァニア州ラトロブの“*Demolizione*”(破壊)、マサチューセッツ州ニーダムの“*Gruppo Liberta*”(自由団)、そしてフロリダ州ヨーバーシティの“*Risveglio*”(覚醒)などの自発的なグループとして、団結した。

これらのグループが、合衆国におけるイタリア系アナキストの行動主義の核心を成していた。残されている新聞資料と現存しているオーラル・ヒストリーは、彼らが広範かつ活動的な存在だったことを証明している。どのサークルも毎週、独学と議論のための会合(ふつう夕方か日曜日に催された)を開いていた。この“サークル”が、公演や勉強会を主催し、劇やダンスパーティー、そしてピクニックといった文化的企画も手掛けたのである。メンバーの数は 20 人～40 人が一般的だったが、例外的にパターソンの“*Il Gruppo Diritto all' Esistenza*”(生存権団)や、イーストハーレムの“*Bresci Group*”(ブレッシ団—1900 年、イタリア王ウンベルト一世を暗殺したアナキスト移民ガエターノ・ブレッシにちなんで命名された)などは、数百人のメンバーを有し、1917 年～1920 年にかけてすさまじい弾圧に襲われるまで、ほぼ 20 年間続いたサークルもあった。

絹織物工であり、かつパターソンで最も卓越したアナキストのひとりであったウィリアム・ガッロ(フィルミノ・ガッロの息子)は、「グループには、300 人から 400 人のアナキストがいて、そのうちほとんどがイタリア人だった」と主張したという。イタリア系アメ

リカ人アナキズム研究を代表する二人の権威—ポール・アヴリッチとヌンツィオ・ペルニコーネの分析によると、イタリア系移民アナキストは三つの派に分類可能とされている。その三つとは、アナキスト共同体主義・アナルコ-サンディカリズム・アナキスト個人主義である。

<アナキスト共同体主義>

このうち最も多くを惹きつけたのが、ロシア人アナキストのピーター・クロポトキンによって広められた、アナキスト共同体主義である。アナキスト共同体主義は、マルクスの資本主義批判を受容していたが、社会主義者の“国家建設による社会変革”というマルクスの計画を退けるものだった。

政府というものは、“社会主義者の政府であろうと、ブルジョワの政府であろうと”彼らにとっては常に、“権力と中央集権的な権威”の表現にすぎなかった。そのため、本質的に“圧制的・抑圧的”なものとされたのである。彼らの考えによれば、“自由を保障するためには、国家は廃止されなくてはならず、社会は連邦制に沿って再組織されねばならない”とされた。その形態は、“自発的な社会の、地域的かつ分権的な連邦をなす”のである。

La Question Sociale は次のように述べている。「我々が欲するのは、王も政府もない社会、人びとが選択したとおりに自由に生きる社会である」と。「主人も奴隷もなく、物差しもルールもなく、すべてが自由、すべてが平等な、アナキーな世界なのだ」と。

アナキスト共同体主義者たちは、人びとが“ひとたびすべての鎖と法的義務とから解放された”ときには、人びとは“強制なしに、共同体に関する彼ら自身の目的を追求するためにエネルギーを捧げる”と、決め込んでいた。

真の社会変革は革命を通じてのみ可能となるという認識を共有してはいたが、アナキスト共同体主義者は“組織的な”グループと“反組織的な”グループ—つまり公的組織の擁護者と反対者—toに、分裂した。合衆国において、この分裂はニュージャージー州パターソンの *La Question Sociale* およびカルロ・トレスカの *Il Martello* 対、ルイージ・ガッレアーニの *Cronaca Sovversiva* とその後継新聞 *L'Adunata dei Refrattari* という形に典型的に示されている。

先の二つのグループは、労働者を組織し、組合や労働者階級の状況改善を目指す諸運動を立ち上げる必要があると信じていた。例えば、彼らは IWW（1905年に設立された革命的組合）を支持し、パターソンにおける絹織物工のストライキや他の工業都市でのストライキを支援した。サルバトーレ・サレルノの主張では、*La Question Sociale* や *Diritto all'Esistenza* グループは、IWW 創立の代表者大会に先立って、産業別組合主義の原理の方を好んでいたとされている。最初期の記事の多くは、フランスの組合（CGT）によって唱えられていた革命的組合主義に似通ったモデルに賛成していたのである。

CGT は労働者たちに対し、産業資本家と工場主に対抗する闘争においてゼネラル・スト

ライキや直接行動そしてサボタージュといった戦法を受け入れるようしきりに促していたのである。こうした路線と鋭く対立したのが、*galleanisti*—つまりルイージ・ガッレアーニの支持者たち—であったが、彼らは反組織的な方向を採用した。彼らは過激主義と、構造化されたすべての組織—労働組合も含む—に容赦なく対立したことで有名であった。ガッレアーニにとって組織というものは、いかなる形態であれ、“権威主義の先触れ”であった。この故に、彼は諸政党および諸組合、そしてアナキスト連合への参加でさえも、激烈に排除したのだった。

合衆国でのイタリア系アナキストの大部分は、以上のようなアナキスト共同体主義の方向を取ったけれども、他の意見もまた存在していた。

<アナキスト個人主義>

アナキスト個人主義は、他の路線の一つであるが、彼らはドイツ人哲学者のマックス・シュティルナー（『唯一者とその所有』で有名になった）の思想に鼓舞された人たちで、アナキスト運動においては少数派であったけれども、目立つ存在であった。

共同体主義および集団組織のいかなる形態をも拒否しつつ、アナキスト個人主義者たちは個人の自由と個々の活動を、何よりも強調した。エンリコ・アッリゴーニ（別名フランク・ブランド）は *Eresia*（1928）という新聞を編集した、個人主義者で最も有名な人物の一人で（1924年から、1986年に他界するまで合衆国で不法に生活を送った）、彼は“我々にとって自由とは、最もすばらしい善であるから、我々は自由に関して一切の妥協を排する”と述べていた。個人主義は人類のもっとも自然な姿だと考えられていたため、社会の基礎となる原理なのだった。

その思想は、「普及させる理論」以上の、“個々の生活をおくり、その生を良く生きる道”だったのである。社会主義—集団主義と組合に重きをおくこと—に対しては、次のような言葉も向けられた。“生を支配・規定するものは、「単一性」ではないし、そうでは決してありえない。生を支配・規定するものは、「差異」そして「一人ひとりの個人間の不一致」「個々の解釈」であり、「個々の行動」なのだ。ということ、悟ることは不可能だ”と。

アナキスト個人主義者らはまた、“頑なで保守的な教義と信条”を排し、それよりも“終始変わり続け、絶えず流動する生の在り方”を重視していた。マッシモ・ロッカ（別名リーベロ・タンクレディ、1910年～1911年の新聞：*Il Novatore* を編集）は、「我々はどのような信条に対しても知的に反正統であり、個々の反乱と階級革命についての無党派—独立した意見を主張する。それはサンディカリズムの狭く・組織的な方法よりもずっと進んだものだ。彼らサンディカリストは未来のユートピアを無視し、社会主義者というのはみな、人道的傾向を否定する。我々は宗教も科学も、天国も現世も信じない。けれども、我々は力と生を信じるのである。」と言い放った。

<アナルコ - サンディカリズム>

こうしたアナキズムの広まりがあったことに加えて、ミカエル・トップの研究を引用しつつ、まとめられている重要な点は、*Federazione Socialista Italiana (FSI)* —イタリア社会主義連合と、イタリア系の諸労働組合の存在が果たした役割の大きさである。前者は1902年にジャチント・メノッティ・セツラーティが設立した。FSIは合衆国北東部に現れていた、無数のイタリア系社会主義サークルをまとめ、その活動と資源を統合しようとし、設立から一年も経ないうちに45支部に拡大、少なくとも100名の公式会員を獲得した。

ミカエル・トップは革命的社会主義とサンディカリズムの広がり、このFSIによる諸々の活動によるところが大きいと主張している。FSIの設立は、アメリカでの新たな事情に対する反応として起こったとされている。1901年までアメリカン・レフトはダニエル・ド・レオンの社会主義労働党(1877年結成)に代表されていた。しかし、その年ユージン・ヴィクター・デブズのアメリカ社会民主党が、モーリス・ヒルクウィット率いる社会主義労働党の分離派と合流、アメリカ社会党(SPA)が結党されたことが原因だった。その分裂はイタリア系移民社会主義者にとって、際どい問題—二つのうちどちらに加わるべきか?—を提起した。

両党とも政治的に大胆さに欠けており、外国人嫌い(ゼノフォービア:示唆的なことに、SPAは1910年まで外国語の連盟を持たなかった)が強いと見なしたセツラーティは、メンバーの所属を自分の下に留めておき、代わりにイタリア系共同体に特有の問題に取り組む、自分たち自身の連合を立ち上げたのだった。だが、そうした統合への努力にもかかわらず、FSIは“改良主義者”と“革命的社会主義者”とに分裂してしまったのである。この苦闘は、社会変革が“ゆるやかな改良と議会制民主主義”を通じてなされるべきか、それとも“社会革命”によってなされるべきかをめぐるもので、ヨーロッパやアメリカと同様イタリアにおける社会主義者たちの闘争にも近似するものだった。

1905年のIWW設立は、FSIとイタリア系アメリカン・ラディカリズムにとってのひとつの転換点となった。イタリア系社会主義の指導者たちがIWWの最初の代表者会議に参加したか否かという点については、いまだに研究者のあいだで決着を見ていないが、イタリア系労働者はこの新しい組織の設立に、大いに熱狂し、1906年の第二回会議でFSIはIWWに加盟する意思を表明した。1911年のユートイカ会議において、ついに“革命的サンディカリズム”を、その公式理念として採用した。

ブルノ・カルトシオは、イタリア系がIWWに惹きつけられた理由は、アメリカ労働総同盟(AFL:1866年に設立された職能別組合の連合体)の排外主義的な態度にもいくぶん原因があると指摘している。AFLは非熟練労働者を排除し、南欧および東欧からの同業労働者に対してあからさまな敵意を持っていたのだという。しかし、カルトシオは第二の重要な要因としてWobblie(IWWのメンバーの呼び名)によるイタリア系への援助について

も述べている。その援助は、彼らの信条と戦術—アナキストによって擁護されていたそれと非常によく似たものだった—を反映したものだ。

実際、IWW の勃興はヨーロッパにおける革命的サンディカリズム発生 の類例であったし、大いに革命的サンディカリズムに影響されたものであった。サンディカリズムはフランスのジョルジュ・ソレルの理念に基づき、20 世紀初めのイタリアにおいて、アルトゥーロ・ラブリオラ、エンリコ・レオーネ、そしてパオロ・マンティエーラにより、“*Avanguardia Socialista*” (社会主義的前衛) と “*Divenire Sociale*” (社会の発生) といった新聞を通じて理念化された。

改良主義的社会主義に向けて、首尾一貫した理念的オルタナティブを提示する努力をするなかで、サンディカリストらは革命的闘争の手段としての労働者階級の活動と組合とを強調した。一般的に南部出身のイタリア系サンディカリストは、イタリア社会党を非難したのだが、それはイタリア社会党があまりに北部プロレタリアートにばかり、焦点を当て過ぎであり、南部イタリア人の苦境を無視していることが原因だった。1904 年までに、サンディカリストは同年 9 月にイタリア初のゼネスト—四日間イタリアを麻痺させるのに成功した—を組織できるほど、大きな支持を得ていた。

アメリカ合衆国におけるイタリア移民のあいだに、革命的サンディカリズムが広まった背景に存在した猛烈な力は、カルロ・トレスカの存在によって与えられた。1879 年 3 月 9 日、アブルツォに生まれたトレスカは、若いころから社会主義を抱き、22 歳のときイタリア鉄道労働組合の書記を務め、地域の社会主義新聞 “*IL Germe*” の編集者でもあった。1904 年、彼は他の活動家と同様、移住を決めた。それは彼の政治活動が生んだ投獄期間を逃れるためであった。彼はフィラデルフィアに居を構え、FSI の頼みで *Il Proletario* の編集を引き受けた。トレスカはその頃すでに、思想的に革命的サンディカリズムの方へ移行しており、1910 年代初頭までにそれはついにアナルコ - サンディカリズムに至ることとなる。

彼は「国家権力の奪取」を目的とする活動を排除し、代わりに「資本主義は、労働者自身の革命的組織によってのみ打倒可能」と考えていた。「サンディカリズムの組織的方法と活動のみが—つまり、サボタージュ、ストライキ、ボイコットといったやり方—そして、真に革命的な認識が、労働者の利益をもたらすことを可能とする」と。彼のサンディカリスト理念宣伝のキャンペーンは大いに成功を収めた。彼の指導の下、*Il Proletario* の発行部数は 4000 部から 5000 部へと増加し、FSI の支部は 30 から 80 へと成長、会員は 1000 名以上となったのである。

しかし、FSI の IWW 加盟は改良主義者と革命派の緊張関係を拡大させ、ついに穏健派の組織脱退を招くこととなった。改良主義派の指導者であった、ジュゼッペ・ベルテッリ (トスカーナ地方エンポリで教授を務め、イタリア社会党の活動家であった) は、カルロ・トレスカが自身の新聞刊行のため編集を離れた後の *Il Proletario* の編集を引き受けるため、1906 年に到着した。数ヵ月後、彼は FSI が “あまりに孤立している” ことと、“もしイタ

リア系移民労働者が、アメリカの社会主義運動に統合し、そこで確立したアメリカ労働組合を通じて活動するならば—そのことによってのみ—彼らは諸権利のために成功裏に闘うことができる”ということを経験した。FSI をアメリカ社会党の保護下に置こうとする、彼のキャンペーンは、最終的に成功はしなかった。FSI の大部分のメンバーは、議会政治を信用しておらず、制度化された政党というものに懐疑的な、革命的サンディカリストであった。だから、彼らは“同化と統合”を抱くよりむしろ、抵抗したのである。FSI の孤立は、イタリアの政治運動と状況の深い影響を反映してもいた。FSI が多くの点で、アメリカ左翼およびアメリカ合衆国よりも、イタリアの左翼およびイタリアと強く結びついた組織であったことを、ミカエル・トップは指摘している。

失意のベルテッリは、1908年にFSIを離れシカゴへ移った。そこで彼は *La Parola dei Socialista* を刊行、二年後には他のイタリア社会主義連盟をSPAの支部として組織した。エリザベータ・ヴェゾッシが指摘しているように、この組織は約1000人の支持者を持ち、そのなかにはアルトゥーロ・カロッチェ、エミリオ・グランディネッティ、アルベリコ・モリナーティ、ジローラモ・ヴァネッリ、そしてジャチント・アルトーといった人たちも含まれていた。彼らは、ストライキの指導者、組合オルガナイザーとしてイタリア系アメリカ労働運動において極めて重要な役割を果たしたリーダーであった。

諸産業のなかで

初期の頃、改良主義的社会主義は特にシカゴや、他の中西部諸都市に集中したが、一方で北東部のイタリア系コミュニティは、アナキズムとサンディカリズムによって独占される状況が続いていた。1910年～1919年の期間、イタリア系移民のラディカルな活動が最高点に達した。IWWとの新たな結合は、FSIの孤立に終わったが、カルロ・トレスカやアルトゥーロ・ジョヴァンニッティ（1912年ローレンス・ストライキにおける指導者）のようなイタリアン・ラディカルを、“国民的に卓越した存在”へと猛烈な勢いで押し上げた。1910年までに、イタリア系はアメリカにおける複数民族で構成された労働力の、必要不可欠な部分を担うようになった。炭鉱労働者の20%、鉱山労働者の10%、織工産業の10%以上、衣類労働者の20%以上を占めたのである。労働史家らが近年主張しているように、イタリア系はこれらの産業の労働闘争において、リーダーシップを発揮し、大きく・闘争的な部分を成しつつ、活発に参加していた。

イタリア系移民は、数多くのストライキに参加しただけでなく、アメリカ労働運動に新たな闘争の要素を一彼らの本国における抵抗の伝統を率いて一広めていった。1912年のローレンス・ストライキの間、イタリア系ラディカルは提案に基づき、ストライカーたちはアメリカ合衆国史上初の、“移動するピケ”を張り、“子供たちの脱出”—子供たちの世話から解放される（かつ、その安全を守り、運動に専念する）ために、近隣の町にあるシン

パの家々に送るといふもので、ストライカーを支援するためにイタリアやヨーロッパでよく用いられた手法であった。彼らは自国で、しばしば警察による酷い鎮圧にあうと、他の労働者よりも暴力的で、粘り強く抵抗したのだった。イタリア人は、“暴力に対しては暴力を” “報復には報復を” という考えによって、仲間の勇気を駆りたてた。

別の拠点—組合

より多くのイタリア系移民が、ストライキに参加するにつれ、組合がラディカルな活動主義にとっての重要な拠点となっていた。Amalgamated Clothing Workers of America (ACWA) —アメリカ合同衣料労働組合、The International Ladies' Garment Workers' Union (ILGWU) —国際婦人服労働組合は、それぞれ1900年・1914年に設立された。これらの組合は、イタリア労働者の労働組合化の希望と決意の、最も良い例だと、Bencivenni は述べている。

1910年代中頃には、衣類産業の労働力のうちユダヤ系がほぼ40%を、イタリア系は30%をわずかに上回るほど占めていた。先に挙げた組合の指導者と、構成員の圧倒的多数はユダヤ系労働者であった。衣類産業におけるイタリア系労働者の数が増加するにつれ、イタリア系オルガナイザーたちは小作農(*paesani*)—英語を解さず、よそ者を信用しない人たちに、援助の手を差し伸べることが、より容易に行えると主張し、“彼ら自身の支部”を要求するようになった。

6年間の交渉と、彼らに組織を許すという組合の保証を得た後、イタリア系は彼ら自身の支部を護った。それらの支部のうち、主要なものはACWAの63支部（アウグスト・ベッランカに導かれていた）と、ILGWUの48支部・89支部であった。イタリア系外套製造工を代表する48支部は、サルバトーレ・ニンフォによる指導の下、1916年に組織された。彼はシチリアから1899年にニューヨークへ到着した移民であった。89支部は、イタリア系婦人服仕立て工組合の代替となった。1919年に専制的なルイージ・アントニーニによって、組織・運営された。彼は南イタリアから渡り、ニューヨークでプレス工として働き始め、ILGWUの副書記長にまでなった人物である。

これらの団体は、10万人のイタリア系労働者で組織された。その成功は、主として社会主義指導者のカリスマ的影響力と才能によるものだった。指導者には、エミリオ・グランディネッティ、ベッランカ兄弟、ルイージ・アントニーニ、アルトゥーロ・カローティ、そしてフォルト・ヴェローナがいる。大抵は南部出身者で、仲間たちの“個別の細やかな感情と価値観”を鋭く認識しており、彼らに組合へ参加することを納得させるため、イタリア系のアイデンティティにおいて、“ある共有されている感覚”に訴えたのだった。例えば、階級の結束（階級意識とエスニック意識は部分的に重なり合っている）を育成するため、“村のきずな”を利用した。また同様に、彼らは組合に対する忠誠を促すために、“家族的な価値観と尊敬”—労働者たちを説得する文句は、「君たちの名を、君たちの家族

の名を、同僚への裏切りを犯すことで汚すなかれ」一を利用した。そして彼らに、「イタリア系でスト破りをした奴には、誰であろうとも、社会的追放が待っている」と警告した。

労働史家スティーブ・フレーザーが述べているように、イタリア系組合のオルガナイザーは、イタリア系移民労働者の信用を得ていたし、“人格主義 (*personalismo*)”一インフォーマルな支援と労働者同士の対一の関係に基づいたある政略の呼び名一を克服することによって、彼らを組合にまとめあげていた。

支部の主要な成功として、女性の労働組合化にも目を配っていることは、Bencivenni がこれまでの研究を乗り越えている点といえる。イタリア系女性労働者は、ドレスおよびワイシャツ産業において、1913年までに労働者の84%を代表していた。最初、彼女たちは労働組合に参加しなかったとされている。イタリア系の家庭において、性別役割がはっきりと定義一男性は家族の主であり、一家の稼ぎ頭。女性は“母と家政婦”という役割一され、女性の行動は制限された点がまずある。カトリック主義は、こうした社会的期待を一女性は従順で、高潔であるべきであると説いて一強化するという、極めて重要な要因であった。近年の研究が示唆するように、こうしたジェンダー規範は、誇張されるべきではないと、Bencivenni は主張する。

ダイアン・ヴェッキオが示しているように、イタリア系女性の生活は、社会とはっきり分かれた一私的な面に、陥ってはいなかった。イタリア系女性は家父長的な文化に受け身の犠牲者だったのではなく、家庭の内外で重要な経済的・社会的選択を行ない、しばしば農業労働者、工場労働者、産婆、小規模なビジネス経営者といった、多様な場所で働いていたのである。ジェニファー・ググリエルモが論証してきているように、彼女たちは労働ストライキに参加し、政治クラブ（それらはしばしば公式の組織とは独立し、また男性から独立して運営されたものであった）を作り出したのである。

全体像を振り返って

ラディカルの指導者の三分の一はシチリア生まれであったが、その他の多くは教育を受けた中産階級あるいは上流階級の出身であり、政府の弾圧を逃れるため、あるいは彼ら自身の夢を追って、新たな世界に来た人びとであった。*soverisvi* は1870年～1880年のあいだに生れ、合衆国に1900年～1910年のあいだ一イタリア移民ピーク時期一に渡った。そのため、彼らは比較的若い（25歳くらいまで）という傾向が強かった。

先に確認したように、たいてい北東部の都市とシカゴに集中していて、*soverisvi* は講演やストライキを組織するため、指導を執り、新聞編集の仕事を果たすために移動が必要とされるときには、いつ・どこであろうとも、移動を厭わなかった。彼らは思想上の違い一それは運動を弱めはしたけれど一を有したにもかかわらず、イタリアン・ラディカルはみな同じ夢を共有した。その夢とは、地球上のすべての人間のため、友愛と社会的平等を確

立ることであった。社会主義、アナキズム、サンディカリズムそしてコミュニズムは、彼らにとって“政治的教義”以上の、“より大きな世界観”であった。

イタリアン・ラディカルは政治的経済的変革を熱望しただけでなく、エリック・ホブズボームのアンダルシア系アナキストに対する言葉を借りるならば—「彼らは新たな倫理的の世界を求めていた」のである。

第五章 *Sovversivi* の文化活動

Circoli—ラディカルクラブ

19世紀末までに、合衆国の社会主義者とアナキストは無数の教育的、社会的、文化的な拠点—IWPAのWorker's CirclesやThe Germans' Arbeiter Ring and Sonatagschuleのような—を発展させていた。*sovversivi*自身の、そうした機関の形態は、チルコリ(*circoli*)という、アナキストや社会主義者、あるいはコミュニストグループと提携した、小さなクラブだった。その目的は、“知識”とイタリア系移民のあいだの“労働者階級意識を進歩させる”ことであった。ラディカルな出版は、そうした組織の告知でびっしりと埋まっていた。

代表的なものは、*the Circolo di Studi Sociali* (社会学習クラブ)であったが、何十ものこうしたサークルが合衆国中でさかんに活動した。*the Circolo di Cultura Moderna*は、1916年にハーレムにて、イタリア系労働者のあいだの文化拡大に努めた。*the Circolo Educativo Operaio*は1920年代に若者たちのあいだに共産主義を宣伝するために生まれた。

どのクラブも、毎週のミーティング、社会的集会、ディベート、そして無数の講演—それらはたいていラディカルな新聞で告知された—を主催した。ほとんどのクラブが政治的・社会的テーマに注目し、他の多くのクラブは文化的・教育的な話題—“芸術と革命”“信仰とは何か?”“女性と家族”“ゾラとトロツキー”といった話題を扱った。集会は規模が小さいのが一般的で、クラブのメンバーに限られていたが、より広いコミュニティー向けの集まりが日曜日に持たれることもあった。こうした文化的イベントは、そのグループの本部、労働組合のホール、あるいは*Case del Popolo* (人民の家)といった場所で行われた。メンバーはたびたび彼らの家で、勉強会を行った。

Librerie Rosse —赤い図書館—

*circoli*は自発的に組織された*librerie rosse*—レッド・ブックストアを通じて、文学の本を入手できるようにもした。アンジェロ・マッサーリというタンパのタバコ産業労働者は、1902年に入会した*the Circolo di Studi Sociali*のことを、自伝において次のように回想している。—「パンフレット、新聞、本を読み、あらゆる種類の社会学的講演を聴く機会があ

ったし、社会主義者とアナキストの二つのグループが組織した、あらゆる講演・ディベートに出席した」と。

レッド・ブックスストア—赤い図書館—のコレクションは、安価な本とパンフレットを広範に取りそろえ、それは社会的小説・ドラマといったジャンルから、プロパガンダ本や反聖職者の小冊子まで様々であった。最も裕福で有名な赤い図書館は、パターソンのアナキストグループ *Diritto all'Esistenza* が運営した、*Biblioteca Sociologica* であった。少なくとも 200 のタイトルグループを持ち、それらの本の多くは国際的な、文学的・政治的人物として有名な—ゾラ、トロツキー、ドストエフスキー、ユゴー、ゴーリキー、レーニン、マルクス、クロポトキン、バクーニン、ゴーリ、そしてマラテスター人びとの著作であった。しかし、他の多くは地域の知識階級によって書かれ、小さな出版社（印刷を行う家）—*Avanti Publishing Company* や *the Casa Editrice Il Martello* のようなところ—で刷られたものだった。

フロリダのタバコ産業に従事したイタリア系は、これらの読み物に、*los lectores* —当時広く存在していた“プロの朗読家”—を雇うことでアクセスすることができたのだという。朗読家は、労働者たちに新聞や政治的パンフレット、そして小説を日に数時間、彼らが工場で働いているあいだ読み聞かせることで、労働者から賃金を支払われていた。

***Giri di Propaganda* —講演を聴く—**

移民たちは、*giri di propaganda* として知られている、組織によって整えられる前の、講演ツアーでの講演を聴くことで、政治的理論やプロパガンダの影響を受けたのだった。*giri di propaganda* は、カリスマ的なラディカルの指導者たちが、合衆国中に散在するイタリア系のコミュニティを、スピーチや政治的ディベートを行うために、旅してまわるものであった。

およそ一時間の講演後、ディスカッションがつづき、それから食事、音楽、ダンスといった形をとることが一般的だった。いくつかの *giri di propaganda* は、一週間～数週間続くもので、他のものは数カ月におよぶ場合もあった。先にも論じた、ピエトロ・ゴーリは 400 もの講演を、合衆国に滞在した一年のあいだに行うことができたのは、まさにこのネットワークのおかげであった。ラディカルの指導者たちは *giri di propaganda* によって、彼らのメッセージを、最も離れたイタリア移民の辺境のコミュニティにまでも届けることができたのだった。

プロパガンダツアーは、ラディカルたちの移民世界をつなぎ、ラディカル・グループと労働者たちのあいだの、トランスナショナルな結びつきを強化するうえでも、中心的役割を果たした。まず、第一に、ツアーは *sovversivi* がお互いに接触を保ち、異なるナショナルティのラディカルとの同盟を創り出す助けとなった。第二に、ツアーはラディカルの理念を普及させ、新たなメンバーをリクルートするという努力に貢献した。そして第三に、

ツアーは労働者たちを共通の問題・要求に引きよせつつ、そのコミュニティーのための統合を生じさせる力となった。多くの移民は、心からこれらのイベントを歓迎し、この企画を、“知の世界に参入するための特別な機会”であり、“最上の敬意と尊重に値する”と考えていた。

Università Popolare —人民の大学—

sovversivi は仲間である移民たちを組織することの、二つの重要な障害が、乏しい教育と、聖職者および *prominenti* (地域の顔役的存在) の支配的な力だということを理解していた。運動を成功させるために、彼らイタリア人たちをその“迷信”“農村主義”“ボスに対する奴隷状態”から解放しなければならないと、信じていた。*Il Proletario* の編集者らは、1902年の記事において、「本や新聞は、労働者の諸権利の勝利を早めるために、最も影響力のある方法だ」と主張している。

sovversivi のエネルギーの多くは、移民大衆を教育し、ローカル・エリートの影響力と闘うための歴大な運動に費やされた。このキャンペーンは様々な形をとるもので、新聞、リーフレット、そしてクラブのための講演、図書館、そして学校もその一環として運営された。*sovversivi* の教育に対する信条のうち、最も野心的な形態をとったのが、*Università Popolare* —非公式の学校で、男性・女性労働者の教育的要求を支援するために創られたもの—であった。その起源は、1870年頃のイングランドにさかのぼり、University Extension program という、すべての人びとに開かれた、より高度な知識を得ることを熱望したプログラムにある。普遍的な教育のためのプログラムは、イングランドから急速にヨーロッパ諸国—オーストリア、ドイツ (Wiener Arbeiterbildungsverein)、ホラント、フランス (Coopération des idées)、そしてイタリア—へ広まった。

主要な目的は、人びとに基礎教育を提供し、科学・文学および芸術の知識を、会談や講演、ディベート、そしてパンフレットや本の伝播を通じて、広めることであった。これらの教育における努力は、西方教会的なものの考え方に重要な変革をもたらした。科学的な知識や、実証主義的思考の広まり、教育の世俗化の拡大、労働運動の高まりが、“教育は普遍的権利であり、すべての人間の知的・社会的・道徳的な前進にとって必要不可欠である”という理念を促進する助けとなったからである。

人民の大学は、イタリアン・レフトの特別な事業となったが、彼らは中産階級の様々なグループ—知識人、政治家、公務員、ジャーナリスト、教師といった人びとを含む—の支援を得ていた。この意味で、彼らは高まりつつある二つの要求の体现者であったといえる。一方は、リベラル—つまり、教育を社会の発展を促進する一方法と見ていた人びと、他方はラディカル—つまり、教育を労働者階級に能力を与える手段だと思っていた人びとである。一年間の激しい議論と準備の後、トリノでは1900年11月に、最初の *Università Popolare* を立ち上げた。つづく数年のうちに、その一步はイタ

リアの、南部を含むすべての主要都市に届いたのだった。いずれの学校も自立し、自己制御されていた。いくつかは労働者階級の運動に参加したし、他のものは規制の公的機関に加入していた。無料のところもあれば、授業料を支払うメンバーに限定されたところもあった。ともあれ、すべての学校は、同じ目的—実証主義的な学習、教育の普遍化、無知と偏見との闘い、大衆のあいだに知への愛を徐々に染み込ませること、労働者階級の倫理的・社会的状態を高めること—を共有していた。

Università Popolare は、その当初から非常に大きな成功を収め、トリノでの初年のプログラム活動は700名の生徒を数え、ジェノヴァでは1500名、ローマ1340名、ヴェニス1226名、そしてミラノ10,000名であった。最初の三年間は、労働者の関心を惹くカリキュラム創出に失敗し、また内部分裂もあったせいで、生徒数は落ち込んだ。それにもかかわらず、*Università Popolare* は教育の役割、およびその将来をめぐる議論の活気を保持し続け、教育改革を必要とする要求に対し、非常に大きく貢献した。大学の主要機関誌—それも*Università Popolare* という呼称だったが、それは1901年にモンターヴェアで刊行され、アナキストのルイーダ・モリナーリによって1918年まで編集された。彼は特に、“自由意志を尊重する”教育学的アプローチを普及させることにおいて、世俗的で科学的な、そして非独断的な教育の必要を主張し、その力を発揮したのだった。

sovversivi は1903年2月21日、アメリカ合衆国での*Università Popolare* を、ニューヨーク市 the *Entre Nous Lyceum* に立ち上げた。カルロ・トレスカは他の人びとともに、1908年にフィラデルフィアで*Università Popolare* を設立するのを助けた。1909年にはピッツバーグにも設立されたのだった。教室の家賃や出版、学校のプログラムや本の配達といった、基本的な費用をまかなうため、メンバーは月謝20セントを支払うこととされていた。しかし、他のラディカルなイニシアティブでも見られたことだが、たいいていの資金は、実際は“資金調達イベント”で得ていたのである。

イタリアにおけるのと同様、合衆国での*Università Popolare* のカリキュラムは多岐にわたり、政治活動にだけ焦点をあてるものではなかった。講義は、健康や医学的問題、科学理論、芸術や文学といったジャンルを扱い、議題は必ずしもラディカルなものではなかったけれども、アプローチは合理的で非宗教的であった。イタリア系コミュニティにおける*Università Popolare* の目的は、実際、カトリック教会と *prominenti* と呼ばれた地域の有力者の影響力に対抗することであった。

よりラディカルな学校—Modern School

sovversivi は、*Escuela Moderna* (Modern School) の情熱的擁護者となった。それは1901年に、カタルニア人アナキストのフランシスコ・フェレールによって進められたもので、*Università Popolare* とは異なり、手段・目的ともにはっきりと革命的で、実験的なものであった。その目的は、“迷信と旧体制の慣習法を破棄し、自由意志を尊重する—つまり、思想

の自由、愛、団結、そして理性に基づく一文化を促進する”ことであった。フェレールは、扇動のかどで逮捕され、1909年に処刑されたが、50以上のModern Schoolが数年のうちにスペイン中に創られたのである。このModern Schoolの理念は、ヨーロッパ・アメリカ双方におけるアナキストおよび社会主義クラブのあいだに影響を持ち続けた。

合衆国に渡ったアナキストは、20以上のModern Schoolを組織した。最初にして、かつ最も影響力を持ったのは、ニューヨーク・セントマーク地区のサンフランシスコ・フェレール・センターであった。卓越したアナキストグループによって1910年に設立され、1918年まで存続した。その学校は、たった9名の生徒から始まったが、エマ・ゴールドマン、ジャック・ロンドン、リンカン・ステファン、マーガレット・サンガー、といった才幹や、ロバート・ヘンリとジョージ・ペロウといった有名な芸術教師らによる講義によって、ニューヨークにおけるラディカル運動の最も重要な文化的中心のひとつにまで、成長したのだった。

第一次大戦期までに、*soversivi*は合衆国において、100近くの自由思想の大学とクラブとともに、少なくとも3つのフェレール大学を設立した。それらは、パターソン、ボストン、フィラデルフィアに創られた。ルドルフ・ヴェコーリの研究では、無料のクラスで英語や経済学、文学、政治科学にわたる様々な学科を提供した日曜学校と夜学校が、特に成功だったとされている。

Picnics Feste, and Dances — 入場料で資金調達 —

近年の諸研究が主張しているように、娯楽は19世紀～20世紀初頭のラディカル運動の一つの重要な側面であった。*soversivi*も多岐にわたるレクリエーション活動—団結と連帯のビジョンを促進すると同時に移民コミュニティの社会生活を豊かにするものだった—に携わっていた。これらのイベントについて、シカゴにおけるアナキスト社会史研究者のブルース・ネルソンも「異なる人びとを、一同に集めるチャンスだった」と言及している。

組合や政党の（それらのメンバーは職業的、あるいは政治的に均質であった）メンバーとは異なり、余暇活動は、男性と女性の区分と同様、“異なる熟練度による分裂、非熟練労働者と小規模経営者の分裂、老人と若者の分裂、年季奉公人と職人の分裂、新着の移民と以前からの定住者の分裂”を乗り越えたのだった。

<音楽>

音楽は、これらのイベントで重要な位置を占めていた。演劇、講演、パレード、そしてピクニック—すべてのイベントが、ラディカル・グループの楽団によるオペラ作品、インターナショナル労働者階級唱歌（“マルセイエーズ”や“インターナショナル”および“赤旗”やイタリア革命歌など）を演奏するコンサートを含んでいた。*soversivi*の文化領域に

おける音楽の重要性は、彼らの *Librerie Rosse* が革命的タイトルの唱歌帳を所蔵していたことにも見られると、Bencivenni は分析している。歌集は数セントで労働者たちに販売されていたし、ラディカル・グループやラディカル新聞の購読者となる際のプレゼントとして、新たなメンバーに贈られていた。

<ダンスパーティー>

ダンスパーティーもまた非常によく催され、人気の高いイベントだった。イタリア系移民のダンス好きは伝説的なものだった。長時間の労働と粗末で辛い生活にも関わらず、彼らはずっと、ともに集まり楽しむ機会を見つけたのだった。他のラディカルたちと同様、*sovversivi* も毎週、より小規模で地域的なダンスパーティーを主催していた。より大きく、公式のものは、祝日一例えば、7月4日（独立記念日）や、大晦日、重要な革命記念日に催された。アナキストのウィリアム・ガッロは、パターソンのピエモンテ・クラブが毎週日曜日に催した、ダンスパーティー（少人数の楽団による音楽伴奏つき）で、ギターを奏で、弟のヘンリーはヴァイオリンを、義弟のスパルタコ・グアベッロはマンドリンを担当し、彼の母は劇（“貧しい生活と、彼らがいかに抑圧されていたか”を題材とした）を演じたという。

<serate speciali — 特別な夕べ — >

地域の組合も、自分たちで個別の定期公演やコンサートを催した。ラディカル新聞はこれらの *serate speciali* を告知し、最後のページで特別な娛樂一夜のプログラム—についての詳細な情報を提供した。これらのコンサートや舞踏会のチケットは、たいてい25セントほどで、一般的に女性は無料だった。*Il Grido degli Oppressi* の記事は、1894年11月30日にニュージャージー州パターソンで開かれた *Serata di Famiglia*—家族の夕べが400~500人のイタリア人が参加、午前四時まで踊って飲んでの大盛況だったことを伝えている。

これらの文化的イベントは、移民生活の日常的な部分になっていった。それらは、娛樂であると同時に、先に少し触れたような資金調達のための、必要不可欠なものだった。つまり実質的には、すべてのラディカル新聞は、赤字と戦い、そしてラディカル運動のための資金を工面するため、これらの社会活動に頼っていたのである。集められた総額は、ラディカル新聞を助けただけでなく、政治的囚人や戦争犠牲者、あるいは逮捕された仲間や負傷した仲間の家族を支援するために使われたのだった。

<ピクニック>

社会化と資金調達のための機会として、他によく企画されたものは、ピクニックであっ

た。先にも述べた、ラディカル新聞の最後のページは、ピクニックの告知もいっぱい載せられていた。*La Questione Sociale* は、ニュージャージーのホーボーケンにあった *Circolo di Studi Sociali* が 1906 年 6 月 15 日、“Libertarian Picnic”を催すことを告知した。案内には、「音楽が宴を盛り上げます」とあり、チケットの値段は「ドリンク 5 杯とお菓子代込み」で 25 セントとされていて、家族や友達と一緒に参加するよう促している。

Bencivenni の分析によると、多くの新聞の告知には、ピクニックは日がな一日続き、サッカー（両足を袋に入れて、跳びはねながら走るレース）や、射的、綱引きといったゲームやコンサート、ダンス、作詩、そしてラッフル—特別な贈り物として、カメラや時計、本、ラディカル新聞の年間購読権、拳銃などが当たる—が含まれると、謳われていたという。

<収穫祭>

多くの人びとをひきつけた一般的なイベントとして、ほかに *the festa della frutta*（果実の祭り）があった。毎年秋に収穫を祝い、果物や野菜で精巧につくられたデコレーションで飾り付ける、イタリア系農民の伝統的祭りであった。1906 年 9 月に、*La Questione Sociale* のグループが主催したこの祭りは、悪天候にも関わらず、圧倒的な成功だったことを報じている。「イタリア系コミュニティーは、我々を落胆させることなどなかった。より良い・より健康な未来の象徴である、あらゆる種類のフルーツトロフィーでいっぱいの、美しいホールは、人びとでごった返していた」と書いている。ピクニックと同じように、この祭りは、公演やゲーム、そしてラッフルなども行われたのだった。

おわりに

sovversivi—過激派—のアメリカ合衆国におけるラディカル文化活動を、Bencivenni の研究に依拠しつつ確認してきた。ラディカルの理念—アナキズム、社会主義、サンディカリズム—は、戦術における対立を有しつつも、その共通の夢を有した点に、彼女は力点を置く。そして、労働史が取り組んできた組合運動史や綱領分析とも寄り添いつつ、イタリア系ラディカルの政治的選択の足跡を、イタリア本国の状況との深いつながりに着目し、FSI などの成功にも言及しながら記述している。長らく見落とされてきた、労働史における女性の存在に光を当てた研究にも共感を示し、イタリア系女性労働者の衣類産業従事者の支部の結実など、重要な視点も含まれていた。

民衆史の一端を担う形でなされてきた余暇研究という領域で見た場合も、政治的理念と余暇とが必ずしも結び付いた形で論じられていなかったところに、*sovversivi* というラディカルの思想に導かれた動機や目的という視点で切り込んだ点は大きな意味をもつ。ただ“ダ

ンスパーティーそのもの”や“ピクニックそのもの”があり、単に“コンサート”を楽しんだという、ファクトファインディングのみ陥りがちな余暇研究を、その裏側から、つまり“何のために”という側面から、描き直したのである。

Bencivenni の主張では、ラディカル活動のための資金調達と、社会化—身分的差異の乗り越えと共同の楽しみ—の機会として、ダンスパーティーやコンサート、ピクニックなどが位置づけられている。力点は、当然ラディカルな思想—政治的立場選択—にある。かつてニーチェは「理念なき実証主義よ、去れ」と言い放ったが、まさに、理念—国際社会主義の潮流のなかに、個々の営みを置き直し、それが“ただ存在した”のでなく、“ラディカルの営みとして存在した”ことを明らかにしたのである。

最後に、「資本主義を打倒し、労働者を解放し、社会的かつ経済的平等を確立すること」という、ラディカルの共有した到達点に共鳴した、Bencivenni の研究が、今読まれるべき理由について簡潔に述べておきたい。

現在の資本主義は、新自由主義グローバリズムの跋扈に示されるように、アメリカ合衆国の国家財政破綻による崩壊の危機が浮上する一方で、同じくアメリカ合衆国の圧倒的軍事力を背景とした、新帝国主義とも呼ぶべき抑圧と搾取が荒れ狂っている。財界と政治家最優先の経済が「民主主義」を矮小化—いや、破壊していることは、ラテン・アメリカ諸国、ソヴィエト社会主義連邦共和国の崩壊、イラク、アフガニスタン、東南アジア諸国の状況にはっきりと表れている。

では、現在の日本はどうであろうか？2011年3月11日に起きた、東日本大震災は「復興」という名を冠した、我々を苦しめる増税を与えはしたものの、本当の復興は全く見通しを持たない。福島では、巨大利権のために原発事故の実態はゆがめられ、資産価値を失った土地に、今も帰れず、そして不十分な補償しかされずに、放り出されたままの人がいる。持たざる人に、“自己責任、自力救済”を押しつける政治家、財界の要人に、二世・三世は非常に多い。この連続性には、“競争社会”を当然のように語る彼らが、そこから“手厚く保護”されていることを読みとらねばなるまい。この矛盾は戦前から今に至るまで放置されたままだ。

被災三県の農業・漁業が壊滅的打撃から立ち直ることのできないでいる矢先に、TPP（しかもその交渉内容は4年間秘密にされるという）加盟を、首相が国会での議論もおざなりのまま、世界に向けて宣言するという、異常な現状がある。この加盟は、日本の農業・漁業を完全に切り捨てることを意味し、被災三県はおろか、日本中のすべての都道府県の農業・漁業労働従事者が（補償の有無は別として）その生活手段を失う＝生きがいも失うということを示している。また、この加盟によって、現在300万人ほどの失業者が、ほぼ倍になるということが、厚生労働省の試算により報告されていることは、あまりにも知られていない。

現政権だけの問題では、全くない。渡辺治氏のグループが、明らかにしてきているよう

に、日本の政治は1960年代以降いっそう保守化を強め、社会党解体を狙った「政治改革＝小選挙区制の導入」によって、国会における労働者階級の代弁者である政党が、その声を失うに至り、1990年代末～2000年代初めの自民党政権によって、自らの地盤であった農村と自営業者を切り捨て（特定郵便局の支持も犠牲とする、郵政民営化もその一環）の新自由主義的改革が次々に行われたことが、すべて、現在の民主党政権への布石なのである。

人びとは、消費者として煽られるけれども、その消費は労働の代価としての賃金によって可能となることは（つまり労働者としての認識は）、縮小されすぎ、不可視化されている。正規労働が非正規労働に置き換えられ続け、TPP加盟によりさらなる失業者が生まれたときに、政治に対して不満を抱くのでは、やはり遅すぎる。政治的立場の選択を行わずして一人にやってもらおうとばかり考え、不満を述べるのはあまりにも容易である。イタリア系ラディカルの、*soversivi* が人びとに訴えた状況が、我々の社会と関係のないものだと、なぜ言うことができるだろうか。

その出版—オルタナティブなメディアとして—も、教育も、講演も、そして余暇—消費的でなく、社会化につながる—も、あまりに弱い立場に置かれた状況に、私たちは生きている。

かつて、加藤周一が大勢順応社会—コンフォルミズム—を批判した際、「反対意見を押しつぶしてしまった社会は、間違いに気付いたとき、方向転換する力を失っているため、変革できない」と述べたが、その意味でも、今の社会に異議申し立てをする、知識人の必要性が—“弱い側の声を代弁する立場選択を行った”有機的知識人の必要性が、切に感じられるであろう。その人たちが、“何をすべきなのか” また “何ができるのか” ということまでも、Bencivenniの研究は思い至らせる輝きを放つのだと、私は考えるのである。